

社説

達す可らず我輩は乗組員獎勵の方便として先づ俸給の増加を主張するものなり

ミハイルの母なる人の家を訪ねぬ。妻は始めて歸しき農夫の屋舎を尋ねたるふとなれば其慘憺たるさまは太く妻の心を動かしぬ。年老いたるミハイルの父は、然るに命に背きし罰にて一百の笞を受けたる身なれば大凡として戸口に打淵れて佇立みけり。尋常勝れたる堅壯の人身なれば、是も此處まで存ふ事あるまじきに。

「妻は志ヨドロフに向て、ミハイルが近日の消息を傳へ可哀き子の學問日に益々進みて其秀抜なる氣象次第に驚かると聞かば必ず諺る事なきやと尋ねしに、連れ奴隸の桎梏を脱せざる中學殖の淵博なるとて、繩解放し得さすべければ安心せよと慰めたれど、夫に愈々束縛の昔に堪へざるべしと答へて更に喜ぶ色なかりき。妻は其言の道理あるを見て、與々も手を盡して、ヨドロフが公爵婦人が身を低うして奴隸の荒屋に來間縦分やマドンナの來降あるとも是はにはあるまじと思ふ如く愕然たりき。マドンナの來降或は夢見る事あらべど、唯公爵婦人が身を低うして奴隸の荒屋に來間せんとは、中々に想像かぬ事なればなり。妻は言葉柔しく慰問して、ミハイルの事を語りしに連れ生前に其子を見るを得ざるべきを悲みたれば、御身決して愁ふる勿れ、公爵家の侍醫マルケーチオツチをして御身の病を診て共に嬉々たる色を面に現はし、妻は是までに知らざる満足を経験したりき。

『斯る物語を煩はしく繰返すは要なきに似たれども、ふは妻の歴史に一紀元を作りしものなれば暫く説くるを聞き給へから。』

『妻は幼時より屢々露西亞人が刻薄にして妻の郷人即ち波蘭人を駆逐するを聞きぬ。されば深く身に染まりしが今や始めて露西亞の社會組織を考ふるに到りき。貴族に生れたる少數の人は土地を所有し、些か勞働せしして土地が與ふる全利益を悉く收得する権利あるに反し、他の勞働せる多數人は單り土地所有の権利なきのみならず。己れが体力を支ふる麵包をだに持るに難んずるは抑も何故ぞや。多少の智識と公平の心とを有するものは恐らくは斯く疑がざるを得ざるべし。斯くて世に社會主義なるものを説くものあるを聞き、キエフに人を頼みて秘密に購買せらるゝ此教理と説ける各種の書籍を購はしめて、勤に研讀して漸く疑難を解し會も全く新なる世界の前前に現はれたる心地したりき。』

『妻は妊娠したる故に健康の頗る容易ならぬを公爵に語りて終に我傳書としてミハイルを呼戻す允諾を得たりき。』

「貴夫、此博
士何ぞ仰しや
博士ミハイ
「貴夫、此博
士何ぞ仰しや
博士ミハイ
「貴夫は之を
や風雨の來ら
ツと睨みぬ。
「なに、此座
す此紳士
ナ。」
「妾は公爵に
て居るンです
「ミハイル」
允許を受けて
服に着更へて
通りを許しつ
「でも貴夫」
誰でも同等に
「他は如何で
よる作法を以
けた書籍は何
「あれはど、」
ンです。」
「誰から借り
で悉皆社會黨
やらう……そ
？」
「否エ、ミハ
「そんなら誰
「妾は其見幕
りて手に當る非
へりて終に氣
呪り捨ひぬ。
「妾は之が原
へ少しの容赦
配し給ひて急
ハイルの曲戻
一診して容解
しむべしと主
引して一ト度
凶。ミハイル
難の衣服を着
れくれたるを
くミハイル